

平成 25 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立境高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	2 1 世紀に生きる社会人として、生きる力と豊かな人間性を育成する。 ・多様な生徒に応じた教育課程・クラス編成等により学力の向上と進路を実現する。 ・切磋琢磨し、自己の多様な能力・適性を発見して才能の開花を図る ・地域に信頼され、地域の期待に応え、地域を支える学校づくりをすすめる。	校訓 「文武両道」「質実剛健」	今年度の 重点目標	1. 基本的生活習慣・心身の健康管理の確立 ・挨拶の励行と掃除等の取組み指導（声かけ等）を通して、人間性やコミュニケーション能力を高め、はじめある生活態度を育成する。 ・様々な教育活動の中で自他を愛し、人権尊重の意識を高め育む。 2. 学力の向上による進路の実現 ・授業の大切さ（学ぶことの大切さ）を実感させ、進路保障が図れる授業づくりに向け、授業参加等による各教科の授業研究を進める。 ・目的別クラス編成を軸にした授業内容や展開方法を工夫し、生徒が理解しやすい指導を行う。 ・明確な進路意識を持たせ、3年間を見通した指導を行う。 3. 部活動などの教育活動の振興 ・県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校・生活指導と併進して教育活動をさらに活性化する。 ・学校生活の基盤である良好な人間関係を育成し、家庭と連携して生徒の指導にあたる。

年 度 当 初					評 価 結 果 (1 0) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 基本的生活習慣・心身の健康管理の確立	○挨拶の励行、服装・清掃指導等を通して、人間性やコミュニケーション能力を高め、はじめある生活態度を育成する。 ○自他を愛し、人権を尊重する意識を高める。	○前年度と比較して、頭髮服装の違反者・遅刻者ともに大幅に減少。ほとんどの生徒が落ち着いて学校生活を送っている。 ○日常的に挨拶が行われており、学校関係者評価委員等からも評価されている。 ○いじめはないが、コミュニケーション能力や対人関係能力の未熟さから友人間のトラブルが起こることがある。	○頭髮服装の違反者・遅刻者が減少する。 ○生徒同士、生徒・教員間の挨拶が日常的に行われる。 ○学習時間を含め、一日の規則正しい生活習慣が確立する。 ○自分と他者とのより良い関係について考え、自他を大切にすることが高まる。	○定期的な服装・頭髮検査の実施と遅刻指導の徹底 ○挨拶・返事・提出物等の指導の徹底 ○「見てすぐ注意・指導」の徹底 ○担任・副担任の連携、面談、家庭連絡によるきめ細かな指導 ○人権LHRの内容精選・計画的な実施	・頭髮、服装は良好であり、挨拶も良くできている。 ・遅刻者もほとんどなく落ち着いた学校生活を送っているが、早退者や保健室利用者が増加傾向にある。 ・担任、副担任で連携して声かけをするなど、きめ細かな対応がなされている。 ・提出物や授業の準備については、ルーズな生徒がいる。	B	・男子の制服の着こなしや女子のネクタイ・スカート丈について、気付いたらその場で注意することを徹底していく。 ・日常的な声かけに加え、生徒自身の行動の振り返りの動機付けができるような指導を工夫する。 ・指導に乗らない生徒に対しては、丁寧に繰り返し根気強く指導を行う。 ・欠席や遅刻を更に減らしていく。
	○環境改善や校内美化に対する意識を高める。	○電力使用量・可燃ごみ排出量ともに、平成22年度比2％減の目標を達成した。 ○11月以降、ゴミの分別状況を校風美化委員が点検し、各クラスの状況を掲示したことで、分別状況の改善がみられた。	○環境改善目標（電気使用量・可燃ゴミ排出量ともに平成22年度に対して3％減）を達成する。 ○ゴミの分別が徹底する。	○T E A S II委員会からの定期的な実態の報告と校内掲示 ○校風美化委員による点検・報告 ○講演会等による環境問題への意識啓発	・電気使用量、可燃ゴミ排出量ともに減少しており、ゴミの分別も良くなってきているが、教室によってはゴミがあり、授業中に拾わせることもある。 ・T E A S II委員会からの報告が定期的に行われて、教室で生徒へ連絡・掲示がなされている。	B	・食堂バック用ゴミ箱の分別の徹底を図る。 ・教室、各自のロッカーの整理整頓を徹底させる。
2. 学力向上による進路実現	○授業研究を進め、進路保障に繋がる学力を引き上げる。	○6月・7月・11月に実施した全国模試において、偏差値50以上50人以上の目標の達成は、各学年とも1教科に、また、1月の全国模試では2年の1教科に留まった。	○全国模試の国語・数学・英語で、偏差値50以上の生徒が50人以上いる。	○模試結果の教科・担任団での分析・共有・活用 ○各教科1回以上の研究授業の実施	・偏差値50以上の人数が目標より少ない。 ・教科内・担任団の中で模試結果の分析・共有が不十分であり、具体的方策が徹底できていない。 ・研究授業は、授業参観旬間に各教科で実施された。 ・英語多読は、8限講習で実施している。	C	・日々の授業に対する意識向上を図る。 ・基礎・基本の繰り返しと弱点分野の補強を図る。 ・模試に対する取組みの改善（講習の見直し等）を図る。 ・模試結果の分析を各教科で十分に行うとともに、結果を教科・学年で共有する。
	○授業内容や授業展開を工夫し、生徒の理解度を高める。	○授業参観旬間を5月・9月に設定。国・地公・数・理・英で研究授業を実施し、授業改善に努めた。 ○生徒による授業評価（6月・12月）の結果では、授業の分かりやすさや進度、理解度に満足している生徒が約8割であった。	○目的別クラス編成や生徒の進路目標に応じた授業を実施する。 ○生徒の学習理解度が向上する。	○クラスごとの授業の目標・内容の精選 ○小テスト・課題の活用による基礎・基本の定着	・教科によっては小テストの継続的な実施により、継続的な学習姿勢が定着してきつつあり、成果も現れてきている。 ・基礎・基本に力を入れ理解度の向上に努力している反面、上位層に対する指導が後手に回っている感がある。	B	・小テストの実施など基礎学力の定着を図るとともに、生徒の関心を高めるような実践的な内容を授業に取り入れる。 ・プリントや添削などの個別指導を取り入れる。
	○3年間を見通した指導により、家庭学習の習慣を確立させる。	○家庭学習時間調査を6月・12月に実施。期間内に2時間以上学習した生徒はそれぞれ60％、48％であった。	○生徒が進路意識を高め、各自の進路目標を早期に明確にする。 ○生徒の50％が家庭学習を1日2時間以上する。	○学習時間調査・面談等による学習時間の把握と指導 ○定期的面接等による進路目標の明確化 ○週明けテストの実施	・3年生は週明けテストの合格率が高く、維持できているが、1・2年生では意識が低い生徒が増加しており、学習習慣の定着につながっていない。 ・家庭学習状況調査の結果を面談等に利用している。	C	・目標を持って学習に取り組めるような動機付けの支援を行う。 ・生徒のスマホ使用の実態を踏まえた対策を講じるべきである。 ・週明けテストの実施形態を再考する。
3. 部活動などの教育活動の振興	○個々の能力や適性を発揮し、多くの部活動が全国大会等で活躍することで、学校の活力を高める。	○全国大会に運動部52名、文化部53名、合計105名の生徒が出場した。	○全国大会へ運動部50人、文化部50人、合計100人以上の生徒が出場する。	○3年間をかけて生徒を育成するという共通の考えによる、継続的な指導の徹底 ○部活動を通じた集団意識の高揚と生徒指導の実施	・各部が精力的に活動を行っているが、運動部の全国大会出場が少なかった。 ・部活動を通じた集団意識の高揚と生徒指導は、十分に達成されている。	C	・技術指導の講習会等に参加し、指導力を身に付ける。 ・生活面や精神面から指導を行い、落ち着き・集中力を身に付けさせる。
	○小・中・高・大の連携を強化し、人的交流や授業連携・研究交流などの充実を図る。 *スクラム教育推進事業 *人間力育成プロジェクト（小学生との交流事業）	○中高連携として、週2回定期的にスクラム担当教員が境一中を訪問して、授業の連携を行ったほか、本校の授業研究会・職員研修を中学校関係者にも公開した。また、橋渡し教材の開発を進めた。 ○小学生との交流事業を9回実施し、延べ小学生235名・高校生175名の参加があった。部活動単位での参加を募り、多くの教職員と生徒の参加があった。 ○4月に2年生全員が鳥取環境大学を、10月に1年生2クラスが島根大学を訪問。また、島根大学・鳥取大学のオープンキャンパスに76名が参加した。 ○英語・理科・国語・数学で大学教員による出前授業（6講座）や大学と連携した教員研修（4回）を実施した。	○中高で連携した学力向上の取組み（英語多読等）が充実する。 ○中高の教員の授業交流・研究交流が充実する。 ○小学生との交流事業への参加者が小学生・高校生とも増加するとともに、内容が充実する。 ○島根大学・鳥取大学・鳥取環境大学をはじめとする大学との連携（出前講座・職員研究等）が深まる。	○スクラム教育推進委員会の定期的開催 ○授業研究会・職員研修の中学校関係者への積極的な公開、中学校等の研究会への積極的参加 ○小学生の交流事業の校内指導体制の整備による参加教職員・生徒の増加 ○島根大学・鳥取大学等への訪問・オープンキャンパスへの参加	・10月に実施した大学等訪問では、特に専門学校でのガイダンスに生徒は大いに刺激を受け、自らの進路について具体的に考えるきっかけとして有効に働いている。 ・中高、高大連携については、教科により差がある。 ・小学生との交流事業は、部顧問・部員の参加が最も実現可能な体制であり、参加した生徒の評判も良い。	B	・中学校の授業研究会へも積極的に参加する。 ・大学教官による出前講座等を活用し、高大の交流を深める。 ・小学生との交流事業に関わる教職員や部活動を少しずつ拡大するとともに、内容の充実を図る。
	○PTA、同窓会等とも協力して、地域活動へ積極的に参加し、地域から期待される学校づくりを進める。	○書道部・吹奏楽部が地域イベントに参加しパフォーマンスや演奏を披露した他、美術部が校外で初の作品展を開催した。 ○運動部を中心に、PTAと連携して地域の清掃活動を行った。（141名参加） ○2月末までに55件の新着情報を掲載するなど、ホームページでの積極的に情報発信した。	○地域活動に積極的に参加する。 ○PTA等と連携した活動が充実する。 ○活動の状況を随時ホームページに掲載し、取組みを地域住民に積極的に発信する。	○部活動単位での地域活動への参加・地域貢献活動の実施 ○学校行事や部活動の大会成績等のホームページへの随時掲載	・部活動での地域イベントへの参加や学校周辺清掃活動など、地域貢献活動が行われている。 ・学校行事については随時ホームページに掲載しているが、部活動の大会成績については更新が十分ではない。	B	・ホームページを最新の大会結果に随時更新する。（部顧問の協力が必要） ・地域参加・貢献活動の企画を増やしていく。